

## 飛鳥資料館のみどころ（11）

### 展示品解説 その3

#### 「高松塚古墳出土品」

1972年に発掘調査がおこなわれた高松塚古墳は、極彩色で描かれた壁画を持つ古墳として現在も注目され続けていますが、飛鳥資料館ではその高松塚古墳の出土品(重要文化財)を展示しています。

石室内部は、盗掘によって荒らされていましたが、壁画とともに、黒漆塗りの木棺を飾った金具や釘、唐様太刀の飾金具、琥珀製丸玉、ガラス製の粟玉・丸玉および海獣葡萄鏡などが残されていました。

木棺金具は、表面の鍍金<sup>と きん</sup>が部分的に残り、裏面に漆で接着した痕跡が残るものもあります。唐様太刀の飾金具は銀製で、太刀の束の先端と鞘の先端を飾るものや、帯を取り付けるための山形金具などがあります。琥珀製やガラス製の玉では、ガラス製粟玉が最も多く残されていました。

こうした出土品の中で、高松塚古墳の年代を定める有力な情報を提供したのが、海獣葡萄鏡です。中国の西安に営まれた698年没<sup>とつ こし して い</sup>の独孤思貞の墓か

ら同型のものが出土していることから、この鏡は遣唐使を通じて中国から持ち込まれたものと考えられています。葡萄唐草文を巡らせた中に想像上の動物達が飛び跳ねるように表現されたその姿には、西アジアとの交流の歴史も感じさせます。

これらの出土品は、常設展示室の最も奥に位置し、展示前面には多彩な光によって星宿図を描いた天井をしつらえています。闇の中から光輝くような展示室の雰囲気を楽しむつつ、高松塚古墳の出土品をじっくりとご鑑賞下さい。

(飛鳥資料館 清永 洋平)



高松塚古墳出土品の展示